

<地域通貨> 都市（まち）の中を巡るお金

大阪ガス（株）エネルギー・文化研究所
豊田尚吾

はじめに

都市が機能的であるためには「人々の日常の営み」が健全でなければならない。本稿ではその営みの一つである経済的な活動を、「お金」を切り口にして考察する。多くの都市で経済取引が活発でない。失業率が高まり、都市自体が衰退しているところも多い。それはなぜなのか。それがどのような問題を引き起こしており、それを解決する方法はあるのか。ここでは地域通貨という考え方を中心に据え、「都市を巡るお金」として、様々な問題提起や提案がなされていることを明らかにし、その意義と問題点を考察する。

都市とお金

お金を使わない都市はない¹。都市では経済活動が分業によって支えられており、分業のもとでは、人々は財やサービスを交換しなければ生活することができない。交換という行為は物々（交換）でも行えるが、お金があれば非常に便利である。物々交換なら自分の作っているもの、例えばお米と、自分の欲しいもの、例えば洋服を直接交換してくれる人を捜さなければならない。しかしお金があると、お米が欲しい人がいれば誰にでもそれを売って、次にお金を払えば洋服を売ってくれる人を捜せばよいのであるから非常に簡単である。このように、お金には財やサービスを交換する手段としての機能が備わっている。その他にも、お米は数年すればまずくなって価値がなくなるが、お金は何年経っても価値は変わらないということで、価値の保蔵手段としての機能も持つ²。また3本のバナナと1個のリンゴが同じ価値 - 例えば100円 - であるというように、価値の評価尺度としての機能も持っている。通常お金はこの3つの機能を持つと言われており、都市の生活には不可欠な存在となっている。

都市において、財やサービスが、それを提供したがっている人からそれを欲しがっている人へ円滑に流れていくことが必要である。それは同時にお金が活発に都市の中をぐるぐると循環していることを意味する。しかし、財・サービスのやり取りがうまく行われず、モノが売れなくて困っているという事態をしばしば見受けられる。これはお金がうまく循環していないとも言える。より具体的には次のような原因がある。

第一に、使うべきお金が外に出ていってしまうことである。輸入などの形で外から財を買えば、お金は出て行きっぱなしで、循環しなくなる³。

第二に、お金を稼ぐための財やサービスの提供機会が制限されていることである。都市では仕事と生活が切り離され、財やサービスのやり取りは、労働力も含めもっぱら企業個人が大部分を占めており、個人個人という取引はごく僅かである。企業との雇用契約（取引）が打ち切られる - すなわち失業する - と、たちまち生活のためのお金を稼ぐ

ことができなくなってしまう。

第三に、お金を貯め込んで使ってくれない人がいることである。貯めて使わないということはお金の流れにブレーキをかけることであるから、循環が滞る原因になる。

これらの問題に対して、様々な解決策が提案されているが、それを地域で独自にお金を発行することで解決できるのではないかと考える人たちがいる。また、そのようなお金は地域通貨と呼ばれている。

地域通貨とは

地域通貨とは国民通貨である「円やドル」の他に、限られた地域内だけで使用可能な通貨のことを指す。LETS、タイムドル、エコマネーなどという名前で、欧米を中心とした世界各国で取り入れられ、それぞれ独自の特徴を持っている。実践されている地域通貨の数は全世界で2000とも言われている。日本での取組の一例として、滋賀県草津市のエコマネー「おうみ」がある⁴。「おうみ」はNPOである草津コミュニティ支援センターが発行し、36団体と50人が会員登録している。流通金額は円に換算して50万円程度と小さいものの、「コーヒー一杯2おうみ」というように、地域通貨の役割をちゃんと果たしている。会員は大工仕事など、できることとして欲しいことをリストに登録し、サービスのやり取りは会員同士が直接交渉する。そのとき、値段も同時に決めることになっている。このように各地で取り組まれている地域通貨制度にほぼ共通する特徴は、金利が0であるため、投機的な目的に使われず、実在する財やサービスの交換手段という機能に特化していること、個人対個人の取引が中心で、庭の手入れや家事の手伝いなど、ちょっとした親切やボランティア活動を取引の対象に取り込んでいることである。

前節の都市におけるお金の循環との問題で言えば、第一に、地域通貨制度導入によって経済取引を地域内で囲い込み、地域経済の自立性を高めることができる。これによって輸入によるお金の流出・漏れを防ぎ、お金の循環を維持できる。第二に、一般の市場では値の付かないボランティア活動や個人の提供するサービスに値付けを行うことができる。これによって失業した人がその労働力を活かす場が確保される。企業への就職以外にも、生活のためのお金を稼ぐ手段を得ることができ、これまたお金の循環が滞ることを防ぐ。半面、取引の囲い込みは一種の鎖国であり、市場を通さない個人サービスの売買は効率性を損なうことにもなりかねない。そこには効率性とは別の価値観である、地域へのコミットメントという考えを取り入れつつ、効率性とのバランスもとっていかなければ弊害の方が大きくなることもある。

また、一口に「地域通貨制度」と総称されているが、実際には同制度は様々な形で実施され、多様な考え方が混在している。特に達成しようとする目的（経済活性化やコミュニティの再生など）の違いによって、何を取引の対象にするか、誰がお金の発行や管理に責任を持つかなどの制度設計が大きく異なっている。

情報多消費型取引の可能性

地域通貨制度の持つ特徴として、一対一の取引（これを相対取引と言う）を基本として
いることがある。財の特性と価格の情報だけを用いる“市場取引”が「情報を効率的に利
用する」という長所を持つのに対し、「誰が」「何処で」作ったかという情報まで財の評
価に含める相対取引は、思いやりや相手への配慮を取引に取り込むことができる⁵。これを
「情報多消費型取引」としよう。そして、後者は前者では手の届かないところを補う存在
になりうる。さらに、今までは省みられなかった「情報多消費型取引」が、情報通信の
驚異的な発展により、電子取引の形で技術的に可能になりうること、環境問題や企業倫
理に対する関心が高まり、公的な配慮を取り入れた取引に対するニーズが大きくなりつつ
あることから、今後重要性と可能性を増すのではないかと考える。（地域通貨制度の多様
性や情報多消費型取引の可能性などについては既に別のところで詳述したので、そちらを
ご参照願いたい⁶）

価格の調整機能

都市におけるお金の循環に関する第一と第二の問題については既に論じた。本説では第
三のお金の貯め込みを取りあげる。お金には、使ってはじめて意味のある交換機能と、持
っていてはじめて意味のある価値の保蔵という機能が混在している。保蔵が度を超すと、
誰もお金を使わなくなり、せっかく作った財やサービスを誰も買ってくれないということ
になる。本当に度を超すことがあるかどうかについては、経済学的にやや複雑な条件の吟
味が必要なのだが、詳しくは他書に譲り⁷、簡単に説明しよう。お金を持っているというこ
とは、現在の消費よりも将来の消費を選択していることに他ならない。また、いつ欲しい
ものが出てくるか分からないし、念のためすぐに使えるお金を持っておきたいとも思うだ
ろう。もし、全ての個人が非常に理にかなった行動をするのであれば、自分の好みに合わ
せて消費のパターンを決めることになる。その結果、今、財・サービスを買う人が少ない
となれば、作った方は値を下げるなどして販売促進にいそしまざるを得ない。そうすると
消費者も安いならといって、将来のためにとって置いた貯金を使って財・サービスを購入
する。このような調整が機能するならば、お金の循環に与える悪影響は大きな問題にはな
らないというのが一般的な考え方である⁸。

満腹感をもたらさないのがお金？

一方、お金には不思議な性質があると一部の研究者は主張している。それはお金には「も
うたくさん」という幸福の満腹点がないという特徴である。お金には持っているだけで幸
福感をもたらすという特徴がある。何を買おうかと思いを巡らしたり、こんなにお金があ
ると安心だとかいう気持ちである。そしてその気持ちはお金が十分あってもなかなか「も
ういい」ということにならないというのである。確かにバナナも時計も自動車も、一部の
マニアは別としてある程度以上はいらないけれども、お金だけは文字通りあってじゃまに

なるものではない。少なくとも他の財と比較して、持っておきたいという熱意が冷める金額は比較にならないほど高いと想像される。これはお金が交換の手段であるが故にほとんどの財・サービスと関連づけることができ、無限の可能性を持ってしまうことが原因ではないかと考える⁹。

そうなるといくら財・サービスを安くしても使わずにとって置いたお金で買おうという人が十分いなくなる。当然売れ残りが発生し、都市に失業者があふれかえることになる。これをお金の流れの面から言えば、お金がいつまで経っても一カ所に滞って使われないという、お金の循環不全、すなわち買い手不足が深刻化することを意味する。そこで地域通貨は以下のような考え方を提起している。一つは自分でお金を発行するという仕組みであり、もう一つはマイナスの金利をつけるという仕組みである。

自己発行するお金

地域通貨制度のいくつかは自分（個人）の責任でお金を発行することができる。つまり、いくらでもお金をおろすことができるキャッシュカードを持つようなものである。原則としてお金を自分で発行することができるのであるから、お金を貯める必要はない。お金は誰でも発行できるから、お金を借りる必要はなくなり、その結果、地域通貨の金利は0である。これによってお金を貯めることに対する無限の執着心を抑えることになる。それが消費にまわってより多くのお金が循環し、健全な経済活動を取り戻すことが期待できる。

一方、「金のなる木」を持つわけではなく、“自分の責任”でお金を発行するわけであるから、長い目で見て発行した分の“責任”はとらなければならない。お金を個人が発行するという事は、地域通貨制度から借金をすることと同じであり、各人、どれだけの赤字があるかが公開されることになっている。お金を発行した人は赤字分を取り返すべく、財を提供して地域通貨を稼ぐことが暗に求められる。これが発行者の責任である。それにあまり赤字額が巨大になりすぎると、責任能力なしと判断され、他の人から取り引きしてもらえなくなるかもしれない。つまり、お金を自己発行できると言っても、節度を維持することとのバランスが問題となる。

また、金利がない地域通貨では、投機も生じない代わりに巨額な投資も行いづらい。

金利がマイナスのお金

もう一つの方法は、地域通貨に対してマイナスの金利をつけるという方法である。交換のためのお金であることを機能させるために、保蔵機能に制限を加えて消費に対するインセンティブを与えることを意味する。現在100円のお金が1年後に50円になるとしたら、当然早く使ってしまうという気になるであろう。マイナスの金利の例として、地域通貨ではないけれども、ゲゼルの自由貨幣（スタンプ貨幣）等が実際に採用された¹⁰。

しかし円やドルなど、プラスの金利を持つ通常の通貨が併存しているとするならば、誰が減価する地域通貨を持とうとするのであろうか。それ以外にも他の比較的保蔵がきく資

産、例えば金（貴金属）や土地などへの需要シフトが促される可能性が大きい。そうなる
と誰も見向きもしない通貨になってしまう可能性もある。

おわりに

以上、見てきたように都市を循環すべき「お金」には様々な問題があり、それに対する
解決策の一つとして地域通貨という提案がなされている。そして実際に多くの都市で採用
されていることを明らかにした。一方で地域通貨制度も万能薬ではなく、まだまだ論ずべ
き問題点が山積している。実際に行われている地域通貨の取組はこのような論点を明確に
意識しておらず、今後、取組の広がりが大きくなるに伴って、大きな壁に直面するであ
ろう。その意味では実践とともに理論的な検討が今後ますます必要となることが予想される。

本拙論は地域通貨に関して、ほんの表層をなでたにすぎない。しかし、これによって、
今はやりの運用対象としてのみ「お金」を見るのではなく、その役割や問題点を根本から
見つめ直し、その方向性を定めることが、大変興味深いことであり、かつ成熟した都市に
は不可欠だという認識を持っていただければ幸いである。

以上

¹ お金を使わないコミュニティはあるが、ここでは都市を「一定地域の政治・経済・文化
の中核をなす人口の集中地域。・・・中略・・・近代資本主義社会の勃興と共に発達して社会
生活の中核となる。（広辞苑）」と定義しているので、お金の利用は前提と考えてもよい
だろう。

² 但し物価が安定していることが必要である。

³ もちろん輸出を行えば、輸入と反対の効果がある。従ってここでの輸入とは、純輸入も
しくは同じことであるが輸入超過（輸入 - 輸出）を意味すると考えていただきたい。経済
力の弱い都市は往々にして域外に財・サービスを売る力に欠けている。

⁴ 「地域通貨エコマネー運動」中日新聞 2000 年 2 月 17 日より。また、日本での取組例は
少なく規模も小さいが、スイスの交換リングでは「ヴィア」という独自の通貨を発行し、
その中心として機能するヴィア銀行の会員は 7 万 6 0 0 0 社、売上は 2 0 0 億フランを
超えている。河邑厚徳 + グループ現代「エンデの遺言 - 根元からお金を問うこと」日本放
送出版協会, 2000 より。

⁵ 例えば、今 2 つのタワシがあるとす。鍋を洗ったりという「特性」も、「値段」も同
一であれば、市場取引においてこの 2 つのタワシは全く区別されることはない。一方、相
対取引では、一方のタワシは遠方の大資本工場で作られたもの、もう一方は域内の障害者
の方が作られたものだと認識できるとする。このときもはやこの 2 つのタワシは同一のモ
ノとは見なされないであろう。一方で、そのようないろいろな情報を、全ての売買の場で
考慮することは効率的ではない。よってあくまで相対取引は市場取引の補完という位置づ
けであるという認識は必要である。

⁶ 拙稿『地域通貨制度が拓く情報多消費型取引の可能性』「第 5 回読売論壇新人賞入選論
文集」読売新聞社, 1999

⁷ 小野善康「不況の経済学」日本経済新聞社, 1994 など。

⁸ 価格の調整速度という点で、新古典派とケインジアンとの相違はある。

⁹ 例えば、1 億円あれば「家を買って...」という夢を見ることができ、1 兆円あれば「企
業のオーナーになり...」という夢が、1 0 0 兆円あれば「現代のピラミッドを...」と思
うかもしれないし、1 0 0 0 兆円あれば「火星に別荘を...」となるかもしれない。

¹⁰ 詳しくは河邑厚徳＋グループ現代「エンデの遺言 - 根元からお金を問うこと」日本放送出版協会,2000などを参照のこと。

参考資料

小野善康「不況の経済学」日本経済新聞社,1994

加藤敏春「エコマネーの世界(5)～(9)」月刊消費者信用,1999～2000

河邑厚徳＋グループ現代「エンデの遺言 - 根元からお金を問うこと」日本放送出版協会,2000

豊田尚吾『地域通貨制度が拓く情報多消費型取引の可能性』「第5回読売論壇新人賞入選論文集」読売新聞社,1999